

## 論文の内容の要旨

論文題目 子どもの能の系譜——世阿弥から長俊まで

氏名 鵜澤 瑞希

本論は、中世の子どもの能役者の実態を明らかにすることを目的とした論考である。

中世の能の世界には、稚児と呼ばれる子どもの役者がいた。男色の対象であった彼らは、貴人の寵愛を得ることで座の支援者の獲得に役立っていたが、それ以上に、稚児は能の美的な部分を担う存在として、座のなかで重視されていた。世阿弥をはじめとする能作者たちは、このような稚児の美を舞台上の効果として活用する子どもの能を残している。活用の方法は作者によって様々だが、子どもを用いた演出には各時代の文芸から受けた影響が見受けられ、能作者たちが同時代の子どもの芸能に対して敏感に反応し、新しい趣向としてそれを取り入れる努力をしていた様子うかがえる。本論は能楽論や作品を通して、子どもの役者が能のなかで担った役割を解明し、それが世阿弥の時代から、その四世代あとの観世長俊の時代まで、歴史のなかでどのような変遷をたどったのか明らかにしていく。

能には子どもの役者を意味する「子方」という用語があるが、この語は近世以降に定着した言葉であることが先行研究に指摘されている。本論は、子方という語が誕生する以前の中世の能の子どもの考察の対象とする。そのため、子方という語を用いない。

考察の対象は、世阿弥の能楽論と作品と、武家の家族を題材にした活劇風の能の作品群である。前半部では、世阿弥の能楽論と作品を分析し、世阿弥が自分の能楽論に基づく稚児の舞の能を作っていたことや、子どもの役者を用いた新しい物狂能の構想を模索していたことを明らかにした。後半部では非世阿弥系の能として、戦争や暴力に巻き込まれる子どもを描いた能に焦点をあて、世阿弥よりあとの時代の能作者たちによって、世阿弥の理想とは対立する荒々しい子どもの能が作られていたことを明らかにした。

各章の内容は以下の通りである。

第一章「寵童の室町時代」では、南北朝時代から室町末期までの、子どもの能の時代背景について考察し、子どもを用いた中世芸能の存在を浮き彫りにした。子どものなかでも特に注目したのは、稚児である。稚児は本来、寺院に仕え、僧の男色の相手をつとめる童子たちだった。寺院のなかで教育を受けていた稚児たちは、教養があり、芸能も堪能だった。そのため中世には、猿楽の稚児や田楽の稚児、寺院儀礼で舞楽や白拍子を舞う稚児など、あらゆる芸能の場に稚児が登場する。また芸能だけでなく、美しい武装で戦場に現れる稚児武者、政治的な意味を担う権力者の寵童なども現れる。この章では、足利尊氏の寵愛を受けた稚児武者饗庭命鶴丸の活躍や、世阿弥に影響を与えた足利義満の寵童、足利義教・義政が鑑賞した武装と稚児の芸能について詳述し、これらの稚児の芸能や風俗が、能に影響を与えたことを考察した。

第二章「世阿弥の子ども役者論」では、世阿弥の能楽論のなかから子どもに関する言説を取り上げ、世阿弥の思考の変遷を分析した。世阿弥の子どもに関する理論は、最初の伝書『風姿花伝』「年来稽古条々」と『至花道』の間で大きく変化している。はじめは子どもの年齢に沿った段階的な教育法を説いていたが、のちに『至花道』のなかで二曲三体論という風体の理論を確立させると、寺院の稚児の姿を特別に重視するようになる。稚児の役者については「年来稽古条々」の段階から、姿の美しさが能の演技に効果的であることに着目していた世阿弥だが、『至花道』になるとますます稚児姿を重視するようになり、稚児姿の美を損なわないよう、稚児時代の教育を歌と舞の稽古に限定し、物まねの習得を禁止するようになる。この章では、『風姿花伝』と『至花道』のほか、『二曲三体人形図』、『拾玉得花』、『遊楽習道風見』などの記事を分析して、世阿弥の理論が『至花道』以降ほとんど変化せず、生涯この教育法を重視し続けていたことを明らかにした。

第三章「世阿弥の稚児舞」では、『至花道』で確立した二曲三体論の理論に基づく世阿弥の作品〈難波梅〉と、世阿弥の作と考えられる〈関寺小町〉〈春栄〉について、子どもの演出の観点から考察した。現行の〈難波〉と〈春栄〉には子どもが舞う演出はないが、世阿弥の時代のこの二曲には、〈関寺小町〉と類似する構成の稚児の舞があったと考えられる。この章では、これらの稚児の舞の能が、世阿弥の教育法を実践するために作られた能であることを明らかにした。また、稚児の舞の特徴を比較し、分析することで、〈関寺小町〉と〈春栄〉の作者が世阿弥であることを検証した。

このような稚児の舞の能を作る一方で、世阿弥は『至花道』の理論とはあまり繋がり

深くない、親子の恩愛を主題にした物狂能も制作していた。第四章「父と子の物狂能」では、世阿弥が新しい物狂能を目指して試行錯誤した、父子の物狂能について考察した。世阿弥が手掛けた父子の物狂能には、〈丹後物狂〉〈逢坂物狂〉〈土車〉などがある。世阿弥はこれらの曲を改作・制作するのにあたって、父と子の親子関係を丁寧に描くことを心がけている。また、〈柏崎〉は母子物狂能だが、世阿弥は父の存在感を際立たせることで、母子の間にある微妙な感情を浮き彫りにする工夫をしていた。この章では、父子という題材に対する世阿弥のこだわりの背景に、これらの物狂能を家族の心理劇として作り上げようとしていた世阿弥の意図と、武家社会の家族観の影響がみられることを論じた。

第五章から第七章では、世阿弥と同時代から存在し、観世長俊の時代まで脈々と作られ続けた、武家家族の恩愛と少年武士の武勇を描く能の系譜を考察した。世阿弥の周囲には、世阿弥の理想にかなう子どもの能だけが存在していたわけではなかった。世阿弥と同時代には、子どもが戦争捕虜になる〈初若の能〉や、落人の少年武士の悲劇を描いた〈笠間の能〉など、稚児の幽玄美を重視する世阿弥の価値観では考えられないような筋立ての子どもの能が上演されていたことが、『申楽談儀』の記事からわかっている。世阿弥よりあとの世代になると、これらの作品の系譜に連なる、武家社会を生きる子どもの姿を描いた能が次々と作られる時代がくる。

第五章「合戦と少年武士の能」では、その最初期の作品である〈笠間の能〉と、これに続く多武峰様具足能〈鶴次郎〉を取り上げ、内容を分析した。まず〈笠間の能（安犬）〉については、本来の内容の復元を試みた。この能には謡本が現存するが、本文は後世の改変を経た、比較的新しい成立の詞章だと考えられる。ここでは現存する本文から、後世に加えられたと思われる要素を取り除くことで、本来の〈笠間の能〉の形を推測した。また、もうひとつの能〈鶴次郎〉は、稚児流鎗馬の扮装をした子どもの役者が、実物の馬・鎧・武器を用いて戦闘の演技をする、特殊演出の能だった。この章では、〈鶴次郎〉が上演された背景や本説、特殊演出の武装の問題を分析し、この能の眼目が親子の恩愛の表現と戦闘場面の演技にあったことを明らかにした。また、延年風流や稚児流鎗馬など、芸能化された武勇を纏う稚児の装いを、趣向として能のなかに取り込んだ、見所の多い作品であったことも指摘した。

武家家族の恩愛と少年武士の戦闘を眼目にした〈鶴次郎〉の構想は、後世の能作者に大きな影響を与えていた。第六章では、この〈鶴次郎〉の影響を最も強く受けた観世小次郎信光の作品について考察した。信光は〈鶴次郎〉の構成や演出を参考にして、〈光季〉〈村山〉という、少年武士の戦闘の能を作っている。また〈鶴次郎〉と、敵討物の〈放下僧〉〈望月〉の構想を融合させた〈二人神子〉という能もある。いずれも、親子の恩愛と戦闘の演技を眼目にした能だが、これらの能は〈鶴次郎〉に比べると構成に無駄が少ないというのが特徴的である。信光は〈鶴次郎〉から多くを学びつつ、〈鶴次郎〉の構成を効率よく整理して、〈光季〉〈村山〉に取り入れていた。また〈二人神子〉でも、〈鶴次郎〉の恩愛と武勇の表現を取り入れている。信光の三作品はすべて〈鶴次郎〉から派生した作品であること

を、ここで明らかにした。

最後の第七章は、信光の子で、父の特徴を受け継いだ観世弥次郎長俊の稚児武者の能〈親任〉〈岡崎〉と、長俊と同時代に上演された記録がある、〈岡崎〉と類似する構想の日吉猿楽の能〈菊池〉について分析した。長俊には信光の影響がみられるが、その一方で子どもの扱い方には独自性があった。〈親任〉と〈岡崎〉に登場する子どもは、どちらも化粧をした稚児として設定されている点に特徴がある。また、長俊は先行作品の主題である恩愛と武勇を、そのまま自分の作品に反映させることはしなかった。寺院の稚児の戦いを描いた〈親任〉では恩愛に、稚児武者の武勇を描いた〈岡崎〉では戦闘描写に重点を置き、それぞれ主題をひとつに絞って描いている。この背景には、主題・構想の類型化の問題があった。信光の〈光季〉〈村山〉は、〈鶴次郎〉の構想を典型的に受け継いでいる部分がある。また、〈菊池〉も類型化した先行作品の構想を取り入れた作品であった。長俊は、〈鶴次郎〉以降に定着してしまった類型の殻を破るため、恩愛と武勇を別々の作品に分けることを考えたのである。第七章では、このような独創性を発揮した長俊の作品の稚児の背景に、稚児物語や御伽草子、軍記物語のなかの稚児の影響があることを明らかにした。さらに、長俊の稚児と世阿弥の稚児を比較し、優美を重視する世阿弥の稚児が廃れ、長俊が描く武勇の稚児が優勢になっていった歴史があることを指摘して、本論の締めくくりとした。